

学生の学びと活動を止めない大学の取り組み (2) 友人・コミュニティーづくりへの対応

早稲田大学

「学生稲門会」と連携し 地方出身者のつながりづくりを支援

学生生活課が取り組んだのが、同郷の学生同士の交流を目的に都道府県・地域別に活動している大学公認サークル「学生稲門会」及び、24の学生稲門会を束ねる「全国早稲田学生会連盟(全早連)」を通じた地方出身の新生のためのコミュニティー形成支援だ。通常、公認サークルの活動内容に対して大学から要望を出すことはないが、コロナ禍で上京できていない新生もいることを受け、全早連が例年実施している新生ウェルカムパーティーのオンライン実施を学生生活課側から提案した。その理由を、学生生活課 福山氏は「大学が新生を早稲田の一員として歓迎していること、また、頼りになる同郷の先輩がいることを発信することで横のつながりを感じてもらいたかった」と振り返る。



早稲田大学ICC(異文化交流センター)が2020年7月10日に実施したオンラインイベント「ICC Art×English Chat Workshop Online～抽象画を描いて楽しく交流しよう～」の様子。早大生・職員が参加し、互いにスケッチをしながら異文化交流を行った。

2020年9月と10月の全2回に渡り実施されたオンラインウェルカムパーティーでは、学生のアイデアをもとに、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、出身地域別に新生5～6人に上級生1人が加わった部屋を作り、その地域をテーマにしたクイズや地元の話、悩み相談、情報共有等を実施。悩み相談では「地方・首都圏を問わず、キャンパスで対面授業を受けられないからこの悩みが出ていた」と福山氏は話す。

「『お勧めのゼミやサークルを先輩から直接聞ける機会がない』『友達づくりはどうすれば』等の悩みが多く共有されていました。そこに、『上京できていないがどうしよう』という相談が加わっていた印象です。ルーム別に盛り上がっている状況が見受けられ、一定の安心感を得てもらえたのではと感じています」。

全学で共有していた Zoom利用に関する知見を活用

全早連への支援に限らず、学生の交流を促す取り組みは、コロナの影響を受け始めた当初から全学で意識されていたことだと学生生活課課長・久保山氏は話す。

SILS先輩プロジェクト主催の、2020年度秋学期オンライン科目登録相談会の様子。SILS先輩プロジェクトメンバーが科目の詳細を説明し、参加者の質問に答える。(左上がプロジェクトリーダーのルクマニさん)



新型コロナウイルス感染症の流行は、学生の交流機会、特に新生のキャンパスでの友人・ネットワークづくりの機会を奪った。その対策として早稲田大学学生生活課と国際教養学部グローバルネットワークセンターが行った取り組みを紹介する。

「サークル活動に制限を掛け始めた20年2月以降、学生から様々な声や要望が寄せられました。その中で、『大学がオーソライズした企画だと安心して参加できる』という声も聞こえていた中、学生生活課だけでなく、キャリアセンターやICC(異文化交流センター)等、学生関連部署でも学生スタッフに協力を得て企画したイベントを実施して学生間の交流の醸成を試みてきました。参加学生が、同じ学生という立場の人に不安や悩みを話すことで、ストレス解消や気持ちの支えになったと感じています」。

実施に当たっては、学内で蓄積されてきたZoom利用のノウハウがフル活用されたという。

「ウェビナーを実施するためのオンラインに特化したファシリテーションのイロハや、様々な障害を持った学生に配慮するためのスライドの表示の工夫やサポート体制の方法等、Zoomを用いた授業や課外活動で得られた知見は全学の会議や打合せの中で共有し、各部署のイベントをより一層充実させるため積極的に反映してきました。」(久保山氏)。

国際教養学部では学生ボランティア組織と協力。 国内外の新生と在学生在をつなぐ

一方、所属学生の1/3を外国からの留学生が占める国際教養学部(略称「SILS」)では、新生と上級生とのつながりを作る上で大きな役割を果たす学部公式のボランティア組織「SILS先輩プロジェクト」が主催する4月・9月の新生向け科目登録相談会や、9月の新生歓迎会をオンラインで実施した。

SILS先輩プロジェクトの今年度のリーダーを務める4年生のナガラジャン・ルクマニさんによると、9月の科目登録相談会には世界各国から50～100人ほどが参加したという。

「各科目の内容を説明したうえで質疑応答を行いました」



オンラインに関するナレッジは、2020年度早稲田祭で43の企画を同時並行でリアルタイム配信する際にも活用された。学生支援課が、配信にあたっての施設利用方法や感染予防策に関する助言・監修、著作権の許諾に関する支援を行った。

だが、授業内容や担当の先生に関する質問等、例年と変わらない質問もあれば、オンライン授業で交わされる議論にどう関わっていくとよいのか等、コロナ禍だからこそその質問もたくさん挙がっていました」(ルクマニさん)。

その中で最も多かった「友達をどうやって作ればいい」の声を踏まえ、SILS先輩プロジェクトのLINEグループやWeChatグループへの登録を促し、月1回、Zoomでの食事をを行うように。SNSのメンバーも増え、授業で出たレポート課題のポイントを質問する学生等も出てきているという。またZoomでの食事会も、毎回10人程度が参加し、つながりを深める機会になっているという。「SNSでも、Zoomでの食事会でも、1年生から多く質問が出てくるので、来日できていないことへの不安があるのかなと感じます。引き続き、イベント等の機会を活用したコミュニティーづくりを続けていきたいと思っています」とルクマニさんは話す。

このような多方面からの取り組みが今後実を結ぶことを期待したい。

(文/浅田夕香)